私のバラ色ではない人生2
身代わり結婚したら敏腕王妃になりました

CHARACTERS



アンセム

ソアリスの夫で国王。
ソアリスの姉と婚約していたが、
今となってはソアリスと結婚して
良かったと思っている。

カイルス

ソアリスの息子。
母親が大好き。

ミフル

ソアリスの娘。
絶世の美少女。

ララシャ

ソアリスの姉。
痩せていることが
自慢だったはずが…

エミアンローズ

ララシャの娘。
甘やかされて育っている。

ソアリス

姉のしりぬぐいで嫌々、
王妃になった元公爵令嬢。
口は悪いが大胆な行動力で
周囲に慕われている。

それぞれの子どもたち

「お母様、さすがでしたわ」

クロンデール王国の王妃ソアリスは王宮の応接室で、夫であり国王のアンセムと娘のアリル、そしてアンセムの護衛と向き合っていた。

今は、ソアリスが王妃をしなければならない羽目に陥った原因を作った〝誘拐王〟リベルが、性懲りもなく王女アリルを自国の王太子の息子の嫁によこせと言ってきたのをけんもほろろに追い返したところだ。

そもそも隣国ピデム王国の王子であるリベルは、元々アンセムの婚約者であったソアリスの姉ラシャに一目ぼれし、はた迷惑にも彼女と自国で結婚したという前科がある。そのせいで、ソアリスはアンセムと結婚する羽目になったのだ。彼女は家族中に「欠陥品」だと言われ、貴族令嬢としては型破りで口が大変悪いのに……

「久しぶりに人にぶつけたら、気持ち良かったわ～今日はよく眠れます」

「いつも眠っているじゃない」

鬱憤を晴らさなくても、ソアリスが毎日よく眠っていることを彼女の周囲の者は皆、知っている。

「まさか婚約を申し込んでくるなんて、びっくりしました」
「ああ、私も何を言っているのか理解できなかった」
「嫌な予感がすると言ったでしょう！　あれは誘拐王なのですから！」
アンセムは一度はっきりと断った娘の婚約の話だとは思わず、また何かララシャのことだろうくらいにしか思っていなかった。
「でも、私のためにお母様がリベル殿下に『鞭を持って追い掛けてやる』と言った時には感動すらしましたわ。で、鞭は持っているのですか？」
「ええ、大臣が良い鞭がありますよって教えてくださって」
「誰だ！」
「エルムート伯爵です」
「……なんという」
絶対、息子のユリウスとマイノスの間で流行った時だと、アンセムは思った。あの虫も殺さずに逃がしてやりそうなエルムート伯爵が、まさかそんな趣味を持っていたとは。
「買ったのですか？」
「ええ、扱いやすいものと傷付けやすいものを一本ずつ。ちゃんと自分のお金で買いましたわよ。いつか機会がないかと、練習はしておりますの。大臣にも筋がいいと言われましてね、ストレス発散にもなります。ほほほ」
ソアリスのワードローブの中にしっかりと鞭が収納されているのを侍女もメイドも知っている。

「まさか、木馬か？」
「ええ、子どもたちが乗らなくなったので丁度いいかと」
ソアリスの私室には、木馬が子ども部屋から移動していた。人払いをした後に罵声とバチンバチンと弾く音がすることがあったが、まさか鞭だったとは。末っ子のカイルスはその木馬に乗って嬉しそうに遊んでいたというのに。
「お父様が叩かれていなくて良かったですわ」
「当たり前だ！」
「お母様も苦労したのですね、暴力なんて最低ですわ」
「お義母上のことは、私も知らなかった」
「そうだったのですか」
アリルは初耳だったが、父であるアンセムはソアリスへの実母からの虐待をさすがに知っているのだと思っていた。
「告げ口したら、脅せなくなるでしょう？」
「脅していたのか？」
ソアリスはさらりと脅すと言っているが、虐待の話が冗談ではないのは分かる。
「ええ、陛下に言ってもいいの？　子どもたちに言っちゃおうかしら、なんて言えば黙りますからね。叩かれた分、仕返しをしておりますのよ」
ソアリスが実家に帰らないので、公式の場でしか会わない祖父母。アリルは気の強そうな祖母だ

とは思っていた。
「気付かなくて、すまなかった」
「そうね。ララシャが突然、リベル殿下の妻になると言い出して陛下と最初に顔合わせになった時も頬に打ちつけられた痕があって、樽が必死こいて隠すように言ったのよ、自分がやったくせに」
「なんだと……」
あの日のソアリスは、確かにかなり不機嫌だった。まさかそんな状態だったとは……話を円滑に進める態度すらないとソアリスに文句を言っていた自分を、アンセムは恥じた。
「言ってくれれば良かったのに」
「それで酷くなったらどうします？　告げ口しただろう？　って、また叩かれたら？」
「それは……」
「家庭内のことは見えないからこそ、慎重に動くべきなのですよ。私の場合は怒りが抑えられず、樽をボコボコにしそうだったので大人しくしていたのですけど。私は発散することができただけましで、やられっぱなしの人だっているのですよ」
不本意ながら王妃となってしまったソアリスは、同級生や夫人仲間に頼んであまり社交に積極的ではない人も茶会に誘い出し、様子を見てもらっている。
「家庭内での暴力防止に力を入れているのは、自分のことがあったからだったのだな」
「ええ、そうですけど？」
「辛くはないのだな？」
「だから鍛えているのではありませんか、体を鍛えれば自信がつきますから」
「そうか……」
「あとは嫌がらせです。自分が手を上げていた娘が家庭内暴力防止に力を入れていたら、勘繰り、後ろ暗さを感じるでしょう？　ふふふふふ」
ソアリスは企み顔であるが、アンセムとアリルは辛さをバネにしているようにしか見えず、彼女の悪い口は自分を守るために編み出したのではないかと思った。
「ロアンスラー公爵家には今まで通り知らない振りをしておいてください。そのほうが私に都合がいいの。樽には樽らしくいてもらわないと」
ソアリスは謝罪など必要としていないと、いつも通りである。
被害者がそう言っているのだから、アンセムは追及しないでおく。だが、ソアリスの実家であるロアンスラー公爵家の面々、特に彼女に樽と呼ばれている、マルシャを今後は睨みつけてしまいそうだ。
「その、樽って言うの。今後、見たらそう思っちゃうわ」
「でも樽でしょう？　ソファで横向きで寝転んでいる姿なんて打ち上げられた何かにしか見えないのよ？」
「っふ、ちょっと」
「その姿で手招きされたことがあって、いよいよ樽らしく起き上がれなくなったのかと思ったわ」
アンセムは想像して、ゲフンゲフンと咳をする。

「でもね、昔は樽も細かったそうなのよ！　今のところは大丈夫だと思うけど、アリルも気を付けるのよ」
「ええ……分かったわ」
アリルはああはなりたくないと、力強く頷いた。
「私が物心ついた時から樽だったけど、出産する度に増し増ししたそうよ。おかげでお父様が酷く貧弱に見えるでしょう？」
ソアリスの父・キリスは元々細身で年を取って痩せた。その上、横にいるマルシャのせいで、余計に細く見える。
「増し増し……」
アリルは自分の体形が気になったが、これからは母という良いお手本と、駄目なお手本として祖母を参考にする。
「だが、鼻毛は関係なかったのではないか？」
アンセムはアリルの相手としてリベルが推薦した王太子の息子・ルイスに話を戻す。あの場でルイスが婦人の胸部ばかり見ていたのは問題だが、彼の鼻毛が出ていることを指摘する必要はなかったのではないか。
「だって、ずっとちろちろと、しかもなくなっているし」
「お母様、お父様には悪戯しませんものね」
「だって公式な場では駄目だと言われたから、陛下にはしていませんわ」

「悪戯？」
「私たちが悶絶しているのを見たことありません？　あれ、全部お母様の仕業よ。絶対に笑えない場で、こっそり変な話を耳打ちしてくるの」
「そうだったのか！　喉に何か詰まらせたのかと思っていたが」
アンセムも何度か夜会などでソアリスの周囲の人々が顔を真っ赤にして苦しそうな姿を目撃していたが、その事情までは知らなかった。原因を知る者はアンセムの周囲にもいたが、上手に説明ができず誰も彼には教えなかったのだ。
「お母様、鼻毛によく出会うのです！　それが苛立つようで」
「だって、きちんとした身なりをしているのに、鼻毛が出ているのよ！　何故、手入れを怠ったのかが分からないの。馬車で揺られている内に、ひょっこり出たのかもしれないじゃない？」
「ぶぶぶ！　馬車ならいいの？」
「そこは従者なり奥方なりが、高貴な毛が出ておりますよって、教えてあげるべきだけど……私に指摘されるのは嫌でしょう？　王妃に鼻毛を指摘されたと、文献に残ったら可哀想じゃない」
「文献って……ふふふっ」
アンセムは自分の鼻が異様に気になった。
「陛下は大丈夫よ、私が必ずチェックしているから。真面目な話なのに、鼻毛なんて出ていたら何も聞く気がなくなるもの。ルイス殿下がいい例じゃない、おい鼻毛って呼びそうになったわよ」
「確かにそうですわね」

ソアリスにじっと見られることが度々あったが、そんなチェックをされていたとは。ホッとしていいのか……互いにひょんなきっかけで結婚した夫婦は知らないことがまだまだあった。
「お母様、家族で出している者がいたらどうするのです？」
「そうね、まだ遭遇していないのよね。カイルスなら抱き上げてしまえばいいし、王女たちも抱き上げられるけど、ちょっと注目を浴びるわよね」
「私たちは異常に気にしていますから、大丈夫です」
「そう？　扇子で隠すのが一番よね、そして軽やかに引き抜く」
「できるの？」
「だから遭遇しないのよ、本番一発勝負よ」
「それは……」
ソアリスは器用だとは言い難く、アリルには失敗する予感しかない。母が近付いてきた時点で自分もきょうだいたちも身構えるだろうが、まさか鼻毛を抜かれるとは思わないだろう。
気にもしていなかったアンセムも、これからは気を付けようと心に誓った。
「あと衝撃的事実に気付いたのですが、私が会った時、ルイス殿下の鼻毛は出ていませんでした」
「まさか！　嘘でしょう……」
ソアリスは驚愕の表情を浮かべている。
「興奮して出たのではありませんか」
「鳥肌が立ったわ。ますます気持ち悪いわね……」

「私はお母様の胸部を見られていたことが、気持ち悪いですよ……」
「私だってまさかと思ったわよ！　カイルスは今のところ、私にしか興味がないでしょうけど、ユリウスとマイノスは大丈夫でしょうね？」
「大丈夫よ！　そんなことしていたら、三王女が黙ってないわ」
兄が令嬢の胸部を見ていると言われたら、恥ずかしくて堪らない。
「そんな兄は嫌よね……私だったら飛び蹴りを食らわせるわ。同世代の子もよろしくないけど、ルイス殿下はばばあにまで興味を持つなんて、よっぽどじゃない」
「ばばあって……」
ソアリスは樽にはなりたくないと言っている。見た目に関しては清潔で人が見て不快でなければいいとしか思っていないが、鍛えている分、十分に若々しい。
アンセムはばばあという言葉で、あることを思い出した。
「アリルが幼い頃にララシャ妃に会った時、〝おば〟って言ったんだよ、覚えているか？」
「っえ」
「あの頃、アリルはソアリス以外には〝おば〟だったからな、伯母には違いないから、間違いではないんだが……多分、おばさん、おばはんの〝おば〟だっただろう……」
「アリルもいい攻撃しているじゃない！」
ソアリスは自分だけではないと笑う。
「絶対、お母様の影響でしょう」

「人のせいにしないでちょうだい！　お母様のことは真似してはいけませんと、口を酸っぱくして言ってあったでしょう？」

彼女は自分の悪い口を直す気はないくせに、子どもたちには駄目だと言い含めていた。

「ソアリス……そう言っていたのか」

「そうよ、だって子どもたちが私を真似たら、王家が輩の集団になってしまうじゃない。教師陣にも私は特殊な訓練を受けているからと、叱るように言ってあったの」

「特殊な訓練……あれだけ聞いていたのに、影響が少ないと思っていた」

全くないとは言えないが、子どもたちが全員、ソアリスの悪い口を真似していないのは驚いたものだ。時々、お母様が言っていたと、汚い言葉を使うことはあったが、『ソアリス様は特殊な訓練を受けている、真似するには過酷な訓練が必要だ』と、教師に脅すように言ってあった。

そして、成長してからはただの悪い口だと分かり、使ってはならぬことを皆、理解した。

「ああ！　そうよ！　お母様、聞いてないのではない？」

アリルは突然、母に教えたい話があったのを思い出す。

「何？」

「そのララシャ妃、体重が増加しているって」

「うっそ！」

ソアリスは信じられないと目をまん丸にする。

マイノスの婚約者であるゾル王国の王女エクシアーヌがその話をした時、ソアリスはカイルスと共に眠っていた。

「エクシアーヌ様が言っていたの」

「ララシャは痩せていることが誇りだったのに。まさか！　樽になっているとか？」

「あり得るかもしれないわよね」

「うわ～樽夫人に、樽王子妃……きっついわ」

もし樽に似ていたらララシャも同じかもとソアリスは思っていたが、本当にそうだとは！

「下手したら、娘もかもしれないぞ？」

「ええ……」

「一人娘だ、絶対に甘やかしているだろう？」

「確か、ミフルと同じ年だったわよね」

「ミフルと並ばされたら、悲惨なことになるかもしれないわね」

ララシャの娘の顔を見たことがないので分からないが、ソアリスの娘のミフルは本人が認めていないものの絶世の美少女である。太刀打ちできる者はなかなかいない。

「今日のことで、会うこともないだろう」

「そうね！」

「そうかしら……なんだか嫌な予感がするわ」

「やめてよ」

「そうだ、ソアリスの勘は今回も当たったじゃないか」

この嫌な勘は当たるのか、当たらないのか。アンセムとアリルは顔を見合わせた。

§

ちょうど同じ頃、ピデム王国に戻ったリベルは兄である王太子・カリルに報告をしていた。
「アリル王女は婚約者を大事に想っているそうなので、婚約は難しそうです……」
「そうか、それなら仕方ない。で、何故そんな疲れた顔をしているのだ？」
「兄上……ルイスの性癖は把握していますか？」
「性癖……？」
一体、なんの話をしている？　息子の性癖まで父親は把握するものなのか？　そうカリルは首を傾げた。
「はい、私も気付いていませんでしたが」
「なんだ？」
「胸ですよ、女性の胸を見ているそうで」
「まさか、誰かに言われたのか」
言われたという軽いレベルではない、リベルはソアリスに捲し立てられて、罵られたと言っても過言ではない。
「はい、アリル王女にも、ソアリス王妃にも言われました。注意すべきだろうと」

「嘘だろう……」
「女性は視線で気付くそうです。確かに不愉快でしょうね、確認をして、今後のためにも注意するべきだと思います」
鼻毛はその都度、確認すれば済む話だが、不快な態度は改めさせるべきだろう。
「そうだな」
「今日の話はなかったことになったので、いい教訓として受け取りましょう」
「ああ……注意しておこう」
無視はできないが息子にどう話そうか、とカリルは気が重くなった。まずは周りに聞いてみるしかない。
そして、重たい足取りで自身の宮に帰ったリベル。
「パパ～」
「エミアン、ただいま」
娘のエミアンローズに抱き着かれて彼の心は温かくなったが、ソアリスからの打撃は相当だった。
リベルに対する王子教育はそれなりに厳しかったが、比較的自由に過ごしていた。ララシャを見初めた際も他国の王太子の婚約者だと咎められはしたが、彼女でないと駄目だと主張を曲げずにいると、話を通してくれ無事に結婚できた。
だから、あのような言葉をぶつけられたのは生まれて初めてだ。
ララシャの婚約は上手く解決できたと信じていて、まさかソアリスが辛い目に遭ったとは思って

もいなかった。
ひとまず、妻のララシャには縁談が纏まらなかったと伝える。
そして、エミアンローズが眠ってから改めて、アリルは今の婚約者と結婚する、縁談はなかったことにしたと伝えた。だが、ララシャは目を吊り上げる。
「こんな良い縁談を断るなんて、どうかしているわ」
誠実な婚約者がおり、こちらは胸ばかり見ている男なのだとしたら、リベルは良い縁談とは言えなかった。エミアンローズの相手が同じだったら、いくら王族だとしても断っていたと思う。
せめて一人だけの胸を見ていたのならともかく、不特定多数となれば、愛人をたくさん作ると思われても仕方がない。
「婚約者と上手くいっているようだから、仕方ないよ」
「絶対に後悔するわ」
いや、もし婚約が上手くいかなかったとしても、ルイスへの後悔はないだろう。
「それはともかく、義母上はソアリス王妃に暴力を振るっていたのか？」
「あれはソアリスが言うことを聞かないからよ。あの子、そんな昔の話をしたの？　幼稚なんだから」
「知っていたのか？」
ララシャがエミアンローズに手を上げているとは思わないが、ロアンスラー公爵家では普通なのか。今さら口は出せないものの、おかしいと思わざるを得ない。

「私は叩かれたことなんてないわよ」
「可哀想だとは思わなかったのか？」
「あの子は私と違って出来が悪かったから、仕方ないんじゃない？」
「そうなのか？　ならば、相当努力をしたのだろうな」
現王妃であるソアリスが今でも出来が悪いは、あり得ない。
一方、彼女は姉のララシャを王太子妃教育の無駄の権化だと評したが、否定できなかった。ピデム王国では皆、ララシャを表に出さなければいいと、匙を投げている。
「まあ、あの子なりに多少の努力はしたのかもしれないけど、周りが上手くやってくれているんでしょう？」
「立ち振る舞いやマナーもか？」
リベルはソアリスの様子を思い出す。捲し立てられた時も、口にする言葉は酷かったが、仕草自体はまるで優雅に話をしているようだった。
「横で誰かに教えてもらえばいいじゃない」
そんな付け焼刃で王妃が務まるはずがない。きっとララシャは努力した後のソアリスを知らないから、昔のままだと思っているのだろう。
「あの子は元々粗暴で口が悪いから、本来はあんな場所にいる子じゃないのよ。私の妹だったから、王太子殿下の婚約者になっただけなんだから」
確かにリベルが見初めなければ、ララシャはアンセムと結婚していた。ソアリスには婚約者がい

なかったと聞いている。
そんな妹の口が悪いことを、さすがにララシャは知っていたようだ。リベルは知らない振りをして聞くことにした。
「口が悪いのか？」
「そうよ、下品な言葉使いをして、気を引こうとするの。すごく幼稚でしょう？」
あれは気を引きたい雰囲気ではなく、抑え込まれたものが噴出したようだった。アンセムもアリルも彼女の口振りに驚いておらず、彼らは前から分かっていた。
そもそも、ソアリスに正直に言っていいと許可したのはアンセムだ。
「ソアリス王妃の結婚相手は考えられていたのか？」
「いないわよ、なかなか見付からなかったんじゃない？」
彼女に結婚したい相手がいた口ぶりではなかったが、王家に嫁ぐことは絶対にないと思って生きていたのだろう。リベルはアンセムに対して申し訳ない気持ちはあったが、実はソアリスに対しては問題なく王妃を務めているので、特に悪いとは思っていなかった。彼女の気持ちなど考えず、王太子妃になれて幸運ではないかとすら考えていたが、全く違ったようだ。
「王家には嫁ぎたくなかったと」
「そう言っていたわね。相応しくないから逃げたいみたいなことを。構ってほしくて言うのよ」
「逃げたい？」
「全部を捨てて逃げるなんて言っていたの。絶対しないくせに。本当に幼稚で困っちゃうわ」

「だが、王太子妃教育はきちんと終えたのだろう。だからこそ王妃になれているんじゃないか？」
「適当に誤魔化したに決まっているじゃない！　きっと、お母様が上手くやったのよ」
「いや、それはない。義母上でどうにかなる話じゃないよ」
母国人以外にはフォローできないからと、外交の場に出席が許可されないララシャには言われたくない。
「いいえ、あの子には無理よ。アンセム陛下はよく側妃を娶らないと思うもの。それか、六人も子どもを産んだおかげじゃない？」
確かに子どもが六人もいれば、側妃など必要はない。けれど、ソアリスがその地位を盤石にしている理由がそれだけであるはずがない。現に、外交先でもソアリスの評判は良い。
「子どもを産ませて、外に出さないようにしていたんだと思うわ。妊娠中なら誰も文句を言わないじゃない」
ララシャと違って、ソアリスは妊娠中も公務を行っていた。文句を言わせないようにされていたのは、ララシャのほうである。何も知らないとはいえ、さすがに偏見がすぎる。
とはいえ、彼女が今後、ソアリスに会うことはないだろうから、リベルは敢えて指摘を控えた。
こんなことで機嫌を悪くさせても、喧嘩をしても、仕方ない。
「まあ、いずれ分かることよ。婚約も断るんじゃなかったと後悔するだけだわ。謝りに来ないのが癪だけど」
ソアリスがララシャに謝ることは一生ない。それだけは、リベルにも分かる。

「それよりも、エミアンに縁談は来ていないの？　さすがにまだ早いかしら？」
「まだ十一歳だよ？　さすがに早いよ」
「そうかしら？　でもそろそろお話がありそうな気がするんだけど」
ララシャはエミアンローズに早く良き素敵な相手をと常々思っており、頻繁にその話をする。
リベルは最初こそまだ考えたくなくて曖昧にその話を避けていたが、最近は慣れ、落ち着いて話を聞けるようになった。彼は娘を愛しているが、幸いなのか、縁談は一度も来ていない。
「ソアリスにも同じ年の子がいたわよね？」
「ああ、ミフル王女だな」
美しいと言われているあの王女は、確かに一度見たら忘れないほど整った顔をしていた。
「婚約者はいないの？」
「ああ、まだ決めていないようだが？」
「そう」
「張り合うものではないぞ？」
「分かっているわよ、いるのかなって思っただけじゃない」
あちらはクロンデール王国の第三王女で、こちらはいずれ王弟の子どもの立場、身分が同じではない。エミアンローズは大事にしてくれる貴族に嫁がせるのがいいとリベルは考えている。
「他の王女二人の嫁ぎ先も多分、国内でしょう？　どこかの貴族に嫁がせるんでしょうね」
クロンデール王国は無理やり娘を他国と結び付けて利を得ようとはあまり考えていない国だ。

アンセムの姉アイリーンはゾル王国の公爵家に嫁ぎ、その国から次男のマイノスの嫁としてエクシアーヌ王女を娶るが、それは利益より、お互いの意向という前提がある。
恋愛感情ではなく、相性を優先したものではあった。
だがララシャは、愛されることが優先の上、人々から羨ましがられる相手でなければならない気持ちが強い。
「いや、それこそいい相手がいたら、他国にも嫁がせるのではないか？」
「そうかしら」
ララシャはミフルを見たことがない。エミアンローズと同い年だから、比べられて可哀想と思っている。
奇しくもソアリスも、絶世の美女と謳われた前々王妃ミランに生き写しのようなミフルが美しいことは理解しており、互いに同じことを思っていたのである。
「エミアンも良い相手を得るために、教育を頑張ってもらわないとな」
「大丈夫よ、私たちの娘ですもの」
「だが……あまり進んでいないと聞いている」
エミアンローズには王族に相応しい教育を受けさせているが、集中力が乏しく、その進捗は芳しくないと聞いていた。本人も母のララシャに泣きついては、授業を度々なくさせている。
リベルとしては教育はきちんとさせたいが、ララシャは自分が匙を投げられた状態だと理解せず、娘もなんとかなると思い込んでいた。リベルが何度も説得を試みたが、エミアンローズが泣いてい

るからと、彼女は聞く耳を持たない。
「厳しすぎるのではなくて？」
「だが、王族としてきちんとしなければ、良い縁談も難しくなってしまうぞ」
「それは大丈夫よ、エミアンは絶対に、素敵なお相手が見付かるわ」
ララシャは娘が自分に似ているからと絶対的な自信を持っている。
「恥を掻くのはエミアンローズなんだよ、恥ずかしい思いをさせたいかい？」
「それはそうだけど……」
「きちんと受けるように言わないと、本人たちが想い合っているのに、相手の家が否と言って覆ってしまっては可哀想だろう？」
「それは、そうね……分かったわ」
もう幼女ではないエミアンローズを、リベルは甘やかしてばかりではいられないと心を強く持つ。
どこに嫁ぐにしても、教育は無駄にならない。

一方、カリルは息子ルイスの性癖については女性に聞くほうが早いだろうと、妻であるオリンダーに婚約の件の報告も兼ねて相談することにした。今まで何も聞いていないので、彼女も気付いていない可能性が高い。
「――婚約はやはり難しかったようだ」
「そう、仕方ないわね」

「それで……ルイスのことなのだが……」
「何？　何かあったの？」
「今から衝撃的なことを言うが、落ち着いて聞いてくれ。冗談ではなく、これからのためにも大事な問題なんだ」
「は、い」
オリンダーはカリルのただならぬ様子に背筋を伸ばした。
「実は、ルイスが女性の胸を見ているようなんだ」
その言葉に、彼女は口元を押さえて絶句する。
「注意すべきだろうと、あちらの王女殿下と王妃陛下からリベルが言われたそうだ」
「う、そでしょ……恥ずかしい」
もはや両手で顔を隠している。母親は父親よりも恥ずかしいと、カリルは妻の気持ちを慮った。
「今後のためにも止めさせないと、婚約者も見付からない。私もこんな話はしたくないが、もしかしたら皆、気付いても、本人や私、君にも言えなかったのかもしれない」
「……そんな」
「それで誰に確認すべきかと思っていてな」
「誤解ということもあるのよね？」
「だが、わざわざ言われたんだ。おそらく、言われなければ気付かないまま。そのほうが怖いだろう」

「それはそうね、メイドに聞いてみましょうか、使用人なら洩らすことはないでしょうから」
「そうだな、男では気付かないかもしれない」
王太子夫妻はその夜、なかなか眠れなかった。
見ているだけでも問題ではあるが、息子が何か仕出かしていたらどうしようかと、脳が疲れ切る。
翌日。オリンダーは不敬には絶対問わない、何かあったのなら正直に話してほしい、これからは必ず対処するから、とメイド長とルイス付きのメイドたちに問うた。
「ルイスが胸を見ていることがあるかしら？」
オリンダーは一体何を聞いているんだと我に返りそうになったが、なんとか真剣な顔で聞いた。
「事実を教えてほしいの、あの子のためにも、あなたたちのためにも」
「……はい、ございます」
「私も」
「私もです」
「私はありません。あまり大きくないからだと思います」
「私もありません」
「事実なのね、ポーラもラミもありがとう」
ポーラとラミはありませんと言った者だ。確かに二人とも細いので、他の三人に比べて胸はあまり強調されていない。
「最近のことかしら？」

「いえ、ここ一、二年でしょうか」
「まあ、そんな前からだったのね。ごめんなさい。触られたりは、ない？」
「それはありません」
「ありません」
「ないです」
無理をして言っている雰囲気はないので、事実なのだろう。
「良くないけど、触っていないことは良かったわ。見ているだけなのね？」
「はい、そうだと思います。私たちは特に胸が出るような服ではございませんから、そこまではありませんが……」
「何かあるの？」
「ドレス姿の方を相手に見付からぬように見ているのに気が付いたことがあります」
メイドの服装でも見ているような者は、ドレスの相手など見たくて堪らないだろう。いや、そうであってはいけないのだ。
「……はあ、そうなのね。言えないわよね、本当にごめんなさいね。早急に紳士教育ではないけど、良くないと理解させるわ」
「そうされたほうがいいかと思います」
「ええ、今の話は他言無用でお願いします」
メイド長とメイドたちに礼を言い、早急に女性への接し方を教育しなければならないと、オリン

ダーはカリルのもとへ急いだ。
「あなた、事実だったわ……」
「……そうか、教育係に指示を出そう。第二王子も一緒に」
「ええ、触ったりはしていなかったけど、大きな方を好んでいるようだわ」
「そ、そうか……だが、まだきっと間に合うはずだ」
「そうね」
二人は教師に恥も外聞もなく事情を話して、教育に組み込んでもらった。
アリル王女との婚約は調べたら婚約者がいたからできないと話すと、ルイスは残念そうにした。だが、それどころではないと王太子夫妻は思っている。早急に息子を矯正して、婚約者を見付けなくてはならないのだから。
これがソアリスだったら、女性不信になるほどに辱めただろう。ルイスは両親がカリルとオリンダーで良かったと感謝すべきである。
アリルはカイルス以外のきょうだいを呼び出して、無理な縁談を持ってきたリベルがソアリスにけんもほろろに追い返された話の顛末を説明した。
結婚したばかりの王太子ユリウスもきちんといる。さすがに彼の妻のルルエにはまだ聞かせられないので、彼女は不参加だ。
「アリル、酷い目に遭ったねと言いたいところだけど、母上の全力を見たかった」

「私も」
「私も」
「私も」
アリルをじっとりとした目で見つめるユリウス、マイノス、エクル、ミフル。
「そう言われると思ったわよ、私だって驚いたわ。お父様がまさかゴーを出すなんて。初めてじゃない。よっぽど怒っていたのだと思うわ」
「父上の隠し玉だな、母上は」
「危なっかしいけどな」
「隠しではないでしょうよ、危険玉よ」
ユリウスとマイノスの会話にエクルがピシャリと言い切り、横でミフルが強く頷く。
「やはり凄かったのか？」
「ええ、言い慣れているから、悪い言葉がぽんぽん出てくるんだもの。誘拐王だの、樽だの、おちょぼ口が気持ちわりぃだの、どんどん口が悪くなって。終わりに近づくにつれて、丁寧な言葉に戻っていったけど、それはそれで怖かったわ」
あーっと全員が察した。悪い口の後で正論をぶち込む、ソアリスのスタイルである。
「それにしても、まさか祖母に叩かれていたとは……」
「私もあの強気なお母様が？　と思ったけど、もしかしたら最初はやり返せなくて、あの悪い口の原点は自分を守るためだったのかと……」

「そうだな……」
マイノス、エクル、ミフルも複雑な気持ちで同意する。
「まあ、これまで通り知らない振りねってことで、でないと脅せないからって」
「でも、樽って……」
「樽にしか見えないわ」
エクルとミフルは顔を見合わせる。
マルシャは孫に樽だと認知されたと知らず、心の中で敵意を向けられる。
「しかし、アリルも厄介な相手に好かれたものだよ」
「胸部がお気に召したのでしょう」
「エクルとミフルは見られていないな？」
「多分？」
「顔はじろじろ見られたけど」
さすがにエクルはまだ見られていなかったが、ミフルの顔には食い付いたのか。
「お兄様たちもそうなのかなんて、お母様に疑われていたわよ」
「嘘だろ……」
「兄上、結婚したのに」
「もしそんなことをしていたら、屍になっていたでしょうね。私が直々に教育しますなんて、言い出しかねないわよ」

皆が絶句した瞬間だった。
母に男女間のエチケットを教育されるなんて恥ずかしいが、クロンデール国王一家でそれを行うのは間違いなく父ではなく母だ。
「うっわ、どんなことになるんだ？」
「ちょっと興味はあるが、身がもたない」
「受けてみたら？」
「受講させてくれって言うのか？　違うのに？」
「受講しましょう」
エクルとミフルが頷き、王女たちによってソアリスのピデム王国で言うところの紳士教育が行われることになった。肩を落としたユリウスとマイノスが三王女と共に歩いているところに、アンセムと彼の側近であるオーランとクイオが出くわす。
「どうしたのだ？」
「お母様の変態辱めカリキュラムです」
「は？」
ソアリスに念のための紳士教育をしてほしいと相談すると、快く引き受けてはくれたが、『変態辱めカリキュラムね』と言われたのだ。ちなみに現在、カイルスはお昼寝中である。
「もし兄様たちが胸部を見ていたらどんな教育が行われたのか、皆で受講しようと」
「それは、酷い目に遭うぞ？」



「存じております。でも興味がありますでしょう？」
「確かに……」
「お父様も受けます？」
結局、アンセムと側近と護衛も受けることになった、変態辱めカリキュラム。
子どもたちとアンセム、側近はソアリスと向き合って並べられた椅子に座った。侍女たちはソアリスの後ろに控え、護衛は所定の配置についている。
「お母様、変態辱めカリキュラム、お願いします」
アリルが声を掛けると、ソアリスはいつもの姿勢の良い佇（たたず）まいではあるが、片手に鞭を持つ。ただ、その出で立ちは教師とも思えない。
「ヘイ！　チブサ、ダイスキボーイ？」
「そこから始まるのですか……」
「ご機嫌ですね……」
意外なノリで始まった。後ろの侍女たちは真顔で背筋を伸ばしている。
母上の侍女はどうしてあんなスンとした顔で立っていられるのかときょうだい全員が思う。もっとも、護衛は完全に驚愕の目をしている。
「ヘイ！　チューチューシタイノカ、ボーイ？　ソレトモ、モミモシタイノカ、ボーイ？　ソレトモ、ママガコイシイノカ、ボーイ？」
「母上……」

「オウ！　ママガコイシカッタノカ、ボーイ？」
「ち、違います！　誤解です！」
ユリウスは否定しているが、慌てた素振りが逆に怪しくなっている。
「ノーノー！　ケッコンシタ、ムスコニアタエル、ママノチブサハナイノヨ」
「誤解ですってば」
「兄上……」
「「お兄様……」」
「第一子って甘えたかったって気持ちが強いって本に書いてあったわ」
「おい！　兄を売るんじゃない」
呆れて呟いた言葉のせいで、すっかり該当者にされてしまうユリウス。
「私はもう結婚しています！　しかも、ボーイって」
「オウ！　シツレイ！　チブサダイスキ、メーン？」
「ノリがいいが、辛い」
「さて、挨拶はこのくらいで」
今の挨拶だったの？　と皆で、顔を見合わせて、引き攣る。
「これからも不愉快に乳房を見続けるなら、私があらゆる権力を使って、チブサダイスキボーイに改名して差し上げましょう」
「差し上げられたくないです」

「渾名はチブスキです！」
「渾名まで……」
「はい、三王女、チブスキ兄様と呼んでみましょう！　さん、はい！」
「「チブスキ兄様～！」」
言われるがまま、三王女は声を揃えて呼ぶ。その声はソアリスにそっくりである。
「はい、よろしい」
「全然、全く、よろしくないよ？」
「地獄だ……」
ユリウスとマイノスは頭を抱えた。改名されなくても、一生呼ばれ続けるだろう。間違えて公の場で呼ばれる可能性だってある。
「そして、さらに背中に刺繍もして差し上げましょう」
「勘弁してください」
「女性は見られているだけでも、不愉快です。男性もいかがですか、じっと局部を見られていたら、誇らしい気持ちになりますか？」
男性陣は首を横に強く振る。
「自信のある方はなるかもしれませんが、女性もそのような者はただの変態です」
「特に王族貴族はドレスを着る機会が多いので、胸を出すことも頻繁です。局部は視界になかなか入りませんが、胸は視線を下げればすぐに入ります。いくら美しい胸でも、それはあなたの胸では

ありません。分かりますね？」
　男性陣は黙って頷いた。
「婚約者、妻でも同じです。それはあなたの胸ではありません。婚約者だから妻だからと人前でも胸を見ている者は、大変気色悪く、下品です。女性を見る時は、胸ではなく目を見ましょう。目が恥ずかしい場合は眉間を見ましょう。いいですか？」
「「「……はい」」」
　ユリウス、マイノスに加え、アンセムとオーランとクイオも答える。
「では実践です。チブスキ撃退法をやってみましょう。護衛がいる場合は任せますが、今回は一人でいる場合とします」
　スチャッとやってきた侍女二人。メディナとポーリアである。ポーリアが女性役、メディナが男性役らしい。今日は侍女三人全員が出勤の日で、残りのキャロラインは見守っていた。
「この方、私の胸を見てくるんですけど」
「はい！　ここ！　危険だと思ったら、まず周りに助けを求めましょう」
　ソアリスが鞭で床をパチンと叩き指摘した。アリルとエクルとミフル、キャロラインも頷く。
「見てほしくて、出しているんだろう？」
「てめーのために出してんじゃねえんだよ！　ドレスを美しく着るために出してんだよ、このクソ変態野郎！」
　ちょっと女性役の口が悪すぎないかと思ったが、おそらく脚本がソアリスなのだろうと、皆、理

解した。
「なんだと？　照れんなよ、俺のために出してんだろう？」
　男性役のメディナが女性役のポーリアに触れようとした場面で止まった。
「はい、女性陣！　ここで金的です。ばちこーんっと、やってやりましょう。足の甲でも、かかとでも、膝でも、いけるなら肘でも構いません！　とにかく動けなくするために、潰すのです！」
「「はい」」
　三王女が返事をし、男性陣は下半身が縮こまる思いだったが、こういったことが起こらないとは限らない。護衛や側近の中の娘を持つ者は、やられて当然だとも思った。
「男性がやられる場合はないのですか？」
「そうですね、女性同士なら後ろ手に縛って、踏み付けて、ドレスを捲り上げてしまえば、終わりなんだけど……抵抗するなら、肩の関節でも外せばいいし」
　さも当たり前だと言わんばかりに、ソアリスはさらりと言ってのける。
「男性が女性にすると何を言われるか分からないから、触るのは厳禁です。ですので、男性の場合は臭いと言えばいいんじゃない？」
「へ？」
「例えば、胸を押し付けられたり腕を取られたりしたら、臭いものを思い出して気分の悪い顔をし、臭いから離れてくれないかって言えばいいのよ」
「それだけで？」

たかが、そんなことで解決するか。
「体臭なのだろうが、すまない、耐えられないと、口元を押さえてえずいたら完璧ね！　余程の女性でない限りは去るでしょう」
「心殺しだわ……」
「確かにそんなことを言われたら、アピールする気力がなくなるわね」
「しかも、王子に言われたなんて知られたら、絶望的でしょう？　あの子、王子に臭いって言われたらしいわ。物凄く臭かったのでしょうね、お風呂が嫌いなのかしら、いや体臭なのかもしれないわって、臭い娘の出来上がりよ」
「少し可哀想な気もするが……」
程度にもよるが可哀想な気がしたアンセムが口にしたのが間違いだった。
「何言っているの、ねえ、メディナ！　あの阿呆阿保娘、あっぱらパールですら臭くて死ぬかと思ったわよね」
「はい、まだ恨んでおります」
以前、ユリウスに会いに王宮にやってきた、今は姿も見ない令嬢である。
「ほら～！」
「ですが、臭くない令嬢に言うのは……という意味で」
「では、漏らしてない？　って言うのは？」
「もっと酷くなっています」

臭いと言うより酷い、完全に理由があって臭くなっているではないか。
「それなら、鼻毛が出ているよ？　ならどうかしら？」
「それがいいかもしれませんね、戸惑うでしょうから」
理解を示したのはアリルである。エクルとミフルもいいかもと頷いた。
「相手が戸惑っている内に去るか。それでも挑んでくるようなら、後ろ手に縛って転がして、人を呼びなさい」
アンセムは臭いやら漏らすやら鼻毛も気にはなったが、先程から縛ると言っているのがひっかかった。ちょうどいい縛るものが傍にあるとは限らないのではないか？
「待ってくれ、縛るものがない場合はどうするのだ？」
「持っているでしょう？」
「「「はい」」」
「持っているのか？」
「はい、持っていますけど？」
子どもたちが各々、組紐を取り出して見せ、心底不思議そうな顔をアンセムに向ける。
「ソアリスが持たせたのか？」
「そうですけど？」
「お父様、持っていないの？」
「縛るのにいるでしょう？」

今さら知る事実に驚きを隠しきれず、オーランとクイオを見た。彼らは首を大きく横に振る。
「後ろ手で結ぶもよし、転がして足を結ぶもよし、軽くて邪魔にはなりませんから、護身術を習わせてから持たせております」
ソアリスは常識でしょうと言う顔であるが、それは彼女の常識である。
護衛がいるので出番はないが、髪を縛れるので持っていて無駄にならない逸品（いっぴん）だとソアリスは思っている。おかげで子どもたちはなんの疑いもなく所持しており、持ち歩いていないアンセムが信じられないくらいである。
「そうだな……」
「陛下も欲しいならあげますわ」
「あ、ありがとう」
ソアリスはそこでパンパンと手を叩いた。
「では最後に、お胸は勝手に見ない、触らない、揉みしだかない！　はい！」
さすがに皆、口に出すのは憚（はばか）られ、気まずそうにしている。
「まあ、本当にしたわけではありませんから、いいでしょう。これで終わりです。またご希望の際はいつでも呼んでくださいね」
颯爽（さっそう）と去っていったソアリスたちを、アンセムたちは静かに見送る。
「とんでもない講習だったが、多少は為（ため）になったな」
男性陣はこくこくと頷き、女性陣は満足そうだった。

変わり種

クロンデール王国には再来年、エクシアーヌ王女がマイノスに嫁いでくる。その次の年はアリルがバーセム公爵家に嫁ぐ。
そのマイノスとアリルは共に学園に通っている。
ある日、学園から帰ったマイノスは、ソアリスの執務室を訪ねた。
「母上、相談があります」
「あら、変態辱めカリキュラム講習のご相談かしら？　よろしくてよ」
彼女は穏やかな微笑（ほほえ）みをしているが、言葉と表情が合っていない。
「ち、違います！　とも言えないよな……アリルから何も聞いていませんよね？」
「学園でのこと？」
「はい、自分で解決しようとしているみたいだったので見守っていたのですけど、もう見てられません。先に言っておきますが、私は一切関わっていませんよ」
「分かったわ、何？」
「はい、夫人たちも聞いてもらえますか？」
今日はポーリアとキャロラインがソアリスに付いており、四人は向き合って座った。

「ベリーナ・ソチヌ男爵令嬢が高位貴族の令息に擦り寄っておりまして……ルーファは相手にしていないのですが、彼にも被害が及んでいるのです。先生や風紀委員が注意をしたのですが、直す気がないのです」

ルーファはアリルの婚約者である。

「まだいるのね、変わり種！　私の時もいたわよ～」

「変わり種？」

「私もです」

「私もでございます」

ソアリスとポーリアとキャロラインは年齢が違うので、その変わり種は同一人物ではない。

「変わり種、素晴らしい表現です。私たちは娼婦学生と呼んでおりました」

「それもなかなかね、キャロラインは？」

「私たちはゴミ女と……」

どれも酷いが、意外にもソアリスの変わり種が一番マシな気がする。

「よくあることなのですか？」

「ユリウスの時も阿呆阿保娘あっぱらパールがいたじゃない」

「確かに……」

「高位貴族は幼少期からしっかりと、下位貴族も入学前に最低限のマナーを学ぶはずなのだけど」

ポーリアとキャロラインがソアリスに頷く。

「実は続きがありまして、そのソチヌ男爵令嬢の友人がミリンティー・オイエン侯爵令嬢なのです。彼女は元気があっていいじゃないなんて言うのです。それで調子に乗って……」

「ララシャの友人の娘だわ……」

ソアリスがあからさまに顔を歪めた。

「そうなのですか？」

「ボロンボンだったか、ボロボロリだったか」

「ソアリス様、ローティーです」

冷静に訂正を入れたのはポーリア。

「全然、違う……」

「そうそう、ローティー。甘ったるい喋り方をするのよ、今も！　王妃様ぁ～ララシャ様はお元気ですのぉ？　知るかいな。で、裏で糸を引いているのはオイエン侯爵令嬢だと言いたいのね？」

「えっ？」

「そういうことでしょう？　婚約者のいないオイエン侯爵令嬢がアリルの後釜になろうと思っているのではない？」

「えっ？」

「えっ？　じゃないわよ、そういうことでしょうよ」

ポーリアとキャロラインがこくこくと頷く。

「そういうことなんですか……怖い」

マイノスはまさかそんな思惑があるとは考えてもいなかったが、ポーリアとキャロラインの様子を見るとソアリスの極論ではないらしい。

「男爵令嬢が高位貴族と結婚なんて難しいに決まっているじゃない。取引しているのか、利用して捨てるつもりなのか」

「だから、庇っているのですね」

「姪がアリル殿下と同い年なのですが」

そこで、手を上げたキャロラインがそう言った。

「コロンちゃんね」

「はい」

キャロラインはノージュリー公爵家の出で、コロンちゃんとはミコロン・ノージュリー公爵令嬢のことだ。ミコロンは女性騎士を目指して幼い頃から騎士団の演習に参加しており、アリルとも親しい。ソアリスはミコロンという名前が気に入り、コロンちゃんと呼んでいる。

「ミコロンが言っておりました、高位貴族の令息にはほぼ婚約者がいると」

同じ年代の公爵家、侯爵家の令息には婚約者がおり、裕福な伯爵家の者にも婚約者が既にいる。学園に入って妙な女性に騙されないように、親のお眼鏡に適った婚約者をあてがっているのだ。それを横恋慕しようとする者が必ず出る。

「コロンちゃんにもいるじゃない」

「彼は……女性受けはあまり……」

「逞しくて素敵ですのに」

ミコロンの婚約者はソルド・マッドリー侯爵令息、長身の体の厚い逞しい青年である。既に卒業し、学園にはいない。

「母上の好みそうな体ですよね」

「ミコロンが言っておりました。女性にあまり好かれないから、それこそ言い寄られたら、コロンとやられそうだと」

「まあ、そんな上手いこと言わせなくていいわ。もし起こったら、私が直々に叱りに参りましょう」

「ありがとうございます！」

キャロラインは本当に嬉しそうに、やったと拳を握っている。

「どう落とし前をつけさせるかってことね、アリルは何をしているの？」

「注意しているようですけど、王女様怖いなんて言われて……青筋をピクピクさせておりました」

ソアリスは珍しく怒るわけではなく、悲しそうな顔をした。

「折角の学園で面倒な時間だこと、お友達とお喋りできる楽しい時間が勿体ないわ」

「母上は巻き込まれなかったのですか？」

「私は婚約者がいなかったからマシだと思うけど、突っかかってくる人はいたわね。あまりに煩い時は、後ろ手に縛って、教師にこの娘、やかましいと連れていったわ」

「そこはブレないのですね……」

マイノスの頭にはソアリスが罪人を連行するように女生徒を連れていく光景が浮かんだ。キャロラインは小さく拍手をしている。

「だって、邪魔でしょう？　友人でもないのに不愉快な言葉をかけてくる者を、何故相手にしなくてはいけないの？」

「もっともですね」

「ルーファということは、おそらくリズも怒っているでしょうね」

「そうかもしれません……」

リズはルーファの母で、ソアリスの親友である。

「リズを怒らせると怖いのよ。どうしようかしらね……オイエン侯爵夫人には関わりたくないし」

「はい、あのグループはご遠慮したいです」

「あら！　ポーリアがそこまで言うのは珍しいわね」

ポーリアはソアリスについている時点で穏やかとは言えないが、人当たりが良い。そして、アプダード侯爵家の出である。

「ええ……あのグループの方に兄が言い寄られて、体液を練り込んだ食べ物や髪の毛を刺繍されたハンカチを渡され……」

「……気色悪いわね」

「はい……庭で焚き上げました」

「ん？　体液って気付くの？」

「気付きませんが、絶対何か入っている、体液だってことになったのです」

「あり得るわよね……」

皆、ゾゾゾッと鳥肌が立った。

「ベリベリアバズレーナは、何になりたいのかしら？」

「ベリベリアバズレーナ……」

キャロラインはまた小さく拍手を送っている。

「母上の理論で行くと、わざと騒いで何か対価を貰うか。利用されているのなら、後釜を狙っているのでしょうね」

「礼儀もマナーも身に付いていないのに？」

「はい、身に付いていないからこそ、できるのでしょうけど」

「そうなのよね、知った上ではできないわよね。ブリンブリンティーもどうにかしなくちゃね」

「ブリンブリンティー……」

今度はキャロラインに加え、ポーリアまで小さく拍手を送っている。

「ブリンブリンティー、母親に似てパツパツのままなのでしょう？」

「ああ……確かに肉々しいですね」

ミリンティーの制服姿はパツパツであった。

「で、引っ掛かった令息はいるの？」

「どこまで本気か分かりませんが、数人……密着して格好いいですねと言われるなんて、貴族令息

はあまり免疫がありませんからね」
「ああ、それこそ痴女辱めカリキュラムが必要かしら」
「はい、ですので、違うとも言えないと思って……」
ソアリスに学園でカリキュラムは任せられないが、彼女たちを辱めてやりたいとマイノスは思っていた。
「ヘイ！　チブサオシツケ、ガール？　エエ、ソンナニキツイイカタシナクテモイイジャナイデスカ、ガール？」
「ああ……押し付けは分かりませんが、後者は言っていますね」
「今の時代も言うのですね」
「私も言われたことがあります」
「私もございます」
「変わらないのね」
ソアリス、キャロライン、ポーリアの三人はしみじみと過去の嫌な光景を思い出していた。
「ちなみに母上はなんと返したのですか？」
「どうして、友人でもないあなたのクソほど面白くない話を私が聞かなきゃいけないんだ？　言ってみろとか」
「ブレませんね」
「あの手の女の話はクソほど面白くない。どうにかして、自分は可愛い、求められているという話

に持っていき、優越感に浸りたいのだよ、気色が悪いだろう？」
ポーリアもキャロラインも、今までで一番激しく頷いている。
「ポーリア、キャロライン、穏便な方法は何がある？」
「そうですね、学園側に再度、礼儀とマナーの時間を取らせるか」
「はい、試験を行うなどでしょうか」
「いいわね、試験を設けて講習を受けさせるか。講師はリズのお母様に頼もうかしら」
「ミッドラー前侯爵夫人ですか！」
声を上げたのはポーリア。
レイドラ・ミッドラー前侯爵夫人といえば、歩く礼儀作法と呼ばれ、非常に厳しく迫力のある婦人だ。「あなた」と呼ばれただけで体が縮こまり、ポーリアとキャロラインたちだけでなく、その親世代も震え上がる存在である。
「ええ、リズを助手に付ければ最強よ」
「母上、そのような方の邸で木に登り、ソファで眠っていたのですか？」
「そうですけど？」
ポーリアとキャロラインが驚愕の表情を浮かべる。
「私もレイドラ様に教えてもらったのよ」
マイノスとポーリアとキャロラインは、キレのあるソアリスの美しい所作に妙に納得がいった。

そして、学園には王妃からではなく被害を被っている保護者からの要望という形で、生徒に礼儀とマナー試験を受けさせることになった。

侍女たちは学園に子どもが通っていないので、リズと、被害を被っていた娘を持つアーラック侯爵夫人のトルカが代表となる。

ソアリスはお茶がてらバーセム公爵家に様子を聞きにいく。今日の彼女の侍女はメディナ。勿論、メディナも事情を聞いて怒り散らかし、私は変わり種をアブラムシと呼んでおりましたと言った。

そして、こびりついていたのねと同情された。

「リズ、その後、ブリンブリンティーとベリベリアバズレーナはどう？」

「どうもこうもないわ、分からない～覚えられない～だそうですわ。ソアリスの言葉を借りるなら、脳味噌ねえのか、よね」

「私の言葉まで……さすがね」

「何年一緒にいると思っているのよ」

ソアリスとリズは学園での友人でもあるが、六歳で知り合い、付き合いは三十年以上になる。

出会ったばかりの頃こそ、公爵令嬢と侯爵令嬢ならきっと清楚だろうと互いに思っていたが、すぐに違うと気付く。ソアリスのほうが口は悪いが二人の性格は似ており、すぐに仲良くなった。

「ごもっとも」

「お母様とも話したのだけど……ソチヌ男爵令嬢のクラスに礼儀とマナーの時間を作って、それでも身に付かない場合は個別指導にするか、最悪は退学ね」

「他にもいるの？」

「あそこまで酷い子はいないのだけど、平民もいるクラスだから、誰でも学んでおいて損はないでしょう？　保護者にも理解いただいているの」

子どもはともかく、礼儀とマナーが学べるのならば有難いという保護者は多い。

「商家でも接客業でも身に付けているほうがいいわよね」

「だから、学園長と相談して授業として組み込もうってことになったわ。一年生の時にしておかないと、どうにもならなくなるじゃない？」

「そうね、レイドラ様々ね」

「学園長の奥様が震え上がったみたいで、揉み手で聞いてくださったわ」

理想の淑女として誰しもが恐れるレイドラが先に文を出したおかげで、学園長は『私たちも困っていたのです』と真摯に事情を聞いてくれた。

「さすがだわ、今度お礼をしなくっちゃ」

「母を怖がらないのはソアリスくらいよ、最初からそうだったものね」

「だって、おば様はうちの樽と違って、理不尽じゃないもの。ちゃんとルールに基づいて怒ってくれるでしょう？」

リズもソアリスが母・マルシャを樽と呼んでいるのを知っており、当たり前に受け入れている。

「私はそれでも昔は怖かったわ、でも今となっては心強い味方ね」

ソアリスの本性を知ったレイドラは、最初の内は『私が矯正しなくては』と使命に燃えていたが、

結局はこうしたほうが美しく見えるとアドバイスする程度に留まった。
何故なら、ソアリスはレイドラの指導を早く終わらせたほうが木登りをできると、所作もマナーも申し分ない。普段は異常に口が悪いだけなのだ。だから、メリハリが大事なのだと指導した。
そして、リズが予定なく訪れたロアンスラー公爵家でソアリスの頬が腫れているのを見て、彼女がマルシャに叩かれていることに気付いた。
『どうしたの？　それ、もしかして叩かれたの？』
『樽よ、いえ母よ。言わないでね』
『どうして……』
『気に入らないと手を上げるの。殴り返してもいいけど、力がまだ足りないから』
『許されないわ』
『私も許さないわ、いずれどんな形でも倍にして仕返しする』
彼女はレイドラにソアリス母娘の仲が悪いとは伝えた。だが、叩かれていることは黙っていた。伝えていたら、レイドラは黙っていられなかっただろう。
ソアリスが母を殴り返すことは一度もなかったが、得意の悪い口での仕返しを現在も行っている。
またリズは、ソアリスがララシャの代わりに王太子妃にさせられると聞いた時、向いていないだろうと思った。常に周囲の視線に晒される王族の立場はソアリスには耐えられない。当のソアリスもその自覚があり、絶対嫌だ、無理だと喚いていた。ところが、レイドラだけはソアリスがなるのはいいかもしれないと賛成した。

立ち読みサンプルはここまで

『でも、耐えられるとは思えません』
『無理する必要はありません。ソアリスらしくあればいい。きっとソアリスも猫を被り続けるのは無理でしょう？　でもね、賛同する者もいるはず』
『そうですか？』
『ソアリスって一度好きになると、離れられなくなるでしょう？　他に替えがきかないのよ。あなたもそうでしょう？　ソアリスに会った日は彼女の話ばかり』
『それは、そうですけど』
そのレイドラの勘は当たった。
結婚した当初は無気力で心ここにあらずであったが、ソアリスは彼女らしい王妃になった。
息子のルーファがアリルと婚約したいと言い出した時、ソアリスと本当に家族になれるかもしれないと、リズの心が躍った。その婚約が決まって、レイドラに話すと、歩く礼儀作法が嬉しさと驚きで飛び跳ねそうになっていた。
『素晴らしいご縁じゃない！　これで正真正銘、幼なじみで、友人で、家族にもなって、あなたどれだけソアリスが好きなのよ』
『自分でもそう思うわ』
『でもおかげで私も家族ね、これからはどんどん割り込むわよ』
『まあ』
今回の件もどうしてもっと早く言わないのかと怒ってから、『任せなさい、家族なのだから』と、